

「程年期が立てば）ちやつちや」

「モシ若旦那、花婿さんが紋附を着て頼冠りをして何と云ふ風體をなさる、大きな聲で唄を歌ふたりして、人が笑ふてますがな」

「イヤ解つた、併し徳兵衛、濟まんが向方の町へ廻つてんか」

「そんな事を仕たら道が損になります」

「損でもかめへん、乞食の時に私の持場やつたよつてに、町内の人が私の顔を知つてる」

漸うの事で参りますと、サア御養子がお越と云ふので、先様では表に幕を張り、玄關には金屏風を引廻し、燭臺には百目蠟燭が點いて居ります、ズツト奥へ通り先づ仲人と御挨拶も濟み、愈々三々九度の御盃も終りますと、仲人は宵の口と云ふので開いて仕舞ました、徳兵衛も一と安心致しまして、ヤレ嬉しやと臺所まで下つて参りますと、若旦那は顔の色を變へて走つて來ました。

「徳兵衛……」

「吃驚しましたがな、若旦那、何だんねあはて」

「徳兵衛、今盃を仕た彼女がバリ／＼か」

「妙な物云ひをしなはんな」

「途方ない、美人やな」

「何うでやす、お氣に入りましたか」

「えろ氣に入りやけども、バリ／＼が氣に入らん、濟まんけどもお前處の家も、此の家も夜通し開けといてや、何時バリ／＼で逃げて歸るや解らんで」

「何を仰つしやるねん」

と漸う納めて置いて徳兵衛も歸りました、此方は六疊の間は金屏風を引廻し、其所に絹夜具が敷いて枕が二ツ並べて御座ります、床の間には山水の軸物が掛つて、唐木の臺の上には香爐が置いて梅が香の一ツも燻いてあろうか、ブーンとえゝ香が致します、宣徳の火鉢には銀瓶が掛つてお湯がシャン／＼と沸つて居ります、菓子鉢には菓子が盛つてある、丸谷焼の煎茶器に、青い絹張りの丸行燈、暗うなし明うなし蓋しうないと云ふ點り方をして居ります、嬢さんは今年十八になる娘盛り、小野の小町か揚貴妃か、衣通姫の再來か、沈魚落雁羞月閉花の粧ありと云ふ手數のかゝる女で、夜具の上にキチンと座つて羞しそうに兩袖で顔を隠して居る、其の可愛らしさは何とも云へまへん、何時の程やら夜の更けるに従ふてブーツと寝入つて仕舞ました、其の間に時刻が來ますと、嬢さんがムク／＼と起き上り、四邊を見廻しますと世間は森閑として居ります、草木も眠る丑滿頃、常念寺の夜半の鐘が陰にもつて、微かにポーン……と諸行無常を告げ渡る、嬢さんは亂髪を梳きながら前を搔合せ、

「モシ若旦那……、モシ若旦那、モシ……」